

論文要旨

【目的】

本研究の目的は、既存の文献より、授乳中の産婦を対象とした母乳分泌促進に関するハーブ療法の効果を明らかにすることである。

【研究方法】

最初に国内外の診療ガイドラインを検索し、次に医中誌 Web、Pub med、The Cochrane Library、EMBASE を使用し、国内外の和文・英文献の検索を行った。検索範囲はデータベース登録開始年～2011 年である。組入れ基準はハーブを介入群とし、対照群と比較している RCT とした。採用文献は「はじめてシート」(南郷,2012)を用いて論文の吟味を行った。

【結果】

英文献 5 件をレビュー対象として抽出した。対象国はインド・インドネシア・ペルー・トルコの 4 か国であった。参加者の組入れ基準は、産後 0 日から 6 か月までの母子と、すべての研究で異なっていた。投与期間は 6 日間から 63 日間の範囲で研究毎に設定されており、アウトカム測定時期は試験開始 3 日目から 63 日目まで研究毎に設定されていた。介入群のハーブは、Torbangun、Shatavari、Fenugreek、Milk thistle の 4 種類であった。母乳分泌量の変化を検討した文献が 3 件、児の体重変化を検討した文献が 3 件、血漿プロラクチン値の変化を検討した文献が 2 件であった。副作用に関する記述がある文献は 4 件で、いずれの研究でも副作用は生じていなかった。母乳分泌量の変化について介入群はプラセボ群に比べて有意に増加していた。児の体重増加について介入による有意差の有無が研究毎で異なっていた。児の生理的体重減少の割合や出生体重回復日数について介入群はプラセボ群に比べて有意差があった。血漿中のプロラクチン値の変化については介入による有意差の有無が研究毎で異なっていた。5 件の文献は、割付け方法が不明などのバイアスリスクが存在する可能性があり、サンプル数が少ない、ハーブの形状や用量、測定方法、介入方法などが研究間で一定ではない、作用機序が不明などの課題が存在した。

【結論】

ハーブ療法による母乳分泌促進効果が示唆された。今後は一層多くのサンプル数で研究を実施し、バイアスリスクを低減し高精度で質の高い研究を行う必要がある。またハーブ療法を広く実践に応用していくため、作用機序や副作用について引き続き検証が必要である。